表音文字は、すでにくり返し述べましたように、文字を自らの力で発明するまでに至らなかった民族が、他国の文字を借り入れるにあたり、最も簡便な方法を選んだ結果の所産である、と私は見ています。だから、その誕生については、西洋の学者、およびこれに追随しているわが国の多くの学者のように高く評価するどころか、これを最低のものとして見えています。しかし、私は「借り物だから価値がない」という見方は致しません。借り物のモーニングだって、持主よりピッタリと良く合うことだってあるのですから、問題はその借り物が、文字の目的や効用の点からみてどうか、ということにかかっていると思うのです。

しかし、どう考えてみても、表音文字は、表意文字よりも、機能的にどうしても劣るのです。文字の目的が、「思想の伝達」にあるのですから、その「思想」を直接代表している表意文字に、表音文字は、太刀打ちできるはずがありません。表意文字は、原則として、一つの思想(言葉と言ってもよい)を一つの文字で表します。「山」「川」「月」「花」と言った具合です。だから、**「一自文字を見ただけで、すぐにその意味を読み取ることができます。」**効用という点で、これ以上の文字は絶対に考えることができません。

これが英語となりますと、

mountain, river, moon, flower

で、4字から8字の長い綴りになってしまい、読みの機能において漢字に劣ることが実に明瞭にわかります。だから、一目読みができるように、分ち書きが考え山され、学習の上でも一目読みの練習が必要とされるのです。

かな文字では「やま」「かわ」「つき」「はな」で、いずれも二字で済み、

その点ではローマ字より優れていますが、これは発音だけしか表していませんので、「かわ」が「川(河)」だか「皮(革)」だかわからないし「はな」は「花」だか「鼻」だか、「漢」だかわかりません。したがって、概念が不明で、思想の伝達が不確実で、かつ遅くならざるを得ません。

表音文字は、止むを得ずして表音文字となったものです。機能的に、表意文字に及ばないことを承知で、表音文字に満足したのです。だから、少しでも、「表意化」によって、その機能の向上をねらっているのです。その一つの現われが、「**語形の固定化**」です。

言葉は変化します。しかし、その言葉の変化にもかかわらず、その言葉を表す綴りを固定して、綴りと発音とに食い違いを生じて、綴りを変えようとしなさい、という事実です。それは、綴りを固定化することによって、その語形と言葉の持つ意味との結び付きを緊密にし、慣れの効果を十分に生かそうとするものです。これは表音文字の「表音」の名に反しますが「表音」は、すでに述べましたように、もともと止むを得ない結果としてそうなったもので、決して文字の理想とするところではありません。ゆえに、「表音主義者」のように、これを矛盾と見たり、「表音文字の墮落」と見たりするのは誤りです。お茶の水女子大学の江湖山恒明教授は、「新かなづかい」を支持して、「表音文字は、音を表すのが精神であるから、発音のずれてしまった歴史的かなづかいを守るのは、精神を失った形骸を守るのに等しい」という見方をしています。しかし、これは事実と反していると思います。かなが表音文字として誕生した時においても、「**表音的に言葉を表す**」というだけのことであって、決して江湖山教授の言われるように、「表音」は直接の目的

でなかったと思います。「音を表す」ことによって**実は意味を表す**ことが目的であったのです。表音は手段であって、決して目的ではあり得ないと思います。だからこそ、言葉が変化しても、表記がすぐその後を追わなかったのだと思います。一般にこの点をあいまいに考えていますが、「表音」がもしもそれほど価値のあるものであり、目的とするに足るものであるなら、**言葉がその発音を変えれば、即座に表記も変えなければならぬはず**です。「表音」ということが表音文字の**生命**であるなら、発音の変化の後を一步も踏みはずさずに忠実に追うはずではありませんか。事実は変化の後を忠実に追わなかったということは、目的が「表音」ではなくて、「表意」にあったと認めざるを得ないと思います。つまり、言葉と表記とが緊密な関係を持つに至っては、発音にかかわらず、一つの表記が一つの言葉を表していると考えられるのであって、その表記を変えることは文字の機能を低下させることにしかならないからです。

英語の「one」を見てください。「one, two」の「one」です。現在の発音は「wʌn」ですが、私たちは英語の語原辞典(ここでは、1898年版 Etymological dictionary of the English language オクスフォード大学)によって、これが、16世紀までは(ouni:)と発音されていたことを知ることができます。(ouni:)の表記が「one」では、これは発音通りの表記と見ることができます。つまり、「one」は16世紀の時にできた表記と見ることができます。その後、この言葉の発音は(oun)に変わり、(wun)に変わり、それから現在の(wʌn)に変わっているのですが、表記の方は、16世紀の(ouni:)のところで、「one」という表記に固定されたまま、少しも変化していません。

この事実を私たちはどう解釈すべきでしょうか。もしも「表音」が目的であり、価値のあることであるなら、言葉の発音の変化とともに、当然綴りを変えなければならないはずです。(ouni:)から(wʌn)までの変化を無視して「one」と表記を一つに通したということは、「表音」に価値を認めていないということでしょう。つまり、彼らも、私たちの祖先と同じように、**最初から**「表音文字によって実は**表意**をねらっていた」のです。音を忠実に表すか表さないかは問題でなかったのです。

そう考えなければこの事実に対する疑問は解けないでしょう。英語は、このような綴りの固定化によって語形の表意化を図っているのです。16世紀以降四百年にわたって変らないこの綴りが、**表意文字的効果**を発揮して、表音文字の宿命的な欠陥をいくらか救っているのです。だからソシュールはこれを「表音文字の表意化」と呼んだのです。このように発音からひどくかけ離れた綴り字というものは、子供の学習に負担になることは勿論です。とても、悪名高い「テフテフ(蝶)」式かなづかいどころの騒ぎではありません。この英語やフランス語の綴りの複雑さに比べたら、日本のかなづかいなどは、不便で困るなどと、とても言えたものではありません。だから、英仏両国に限らず、欧米諸国でも、「綴りを発音通りに改めよう」という主張や運動はないではありません。とりわけ、小学校の教師の中にその意見が強いように聞いています。しかし、それが、どこの国においても、実際の改訂までに至らないのは、国民の良識によるものだと思います。つまり、文字の目的が「表意」にあって、綴りの変化、語形の変化は、長年月の間に折角でできた文字の「表意化」を破壊することになるからです。目的が「達意」にあるのですから、文字の学習の容易という、いわば

手段の手段とも言うべきもののために、目的にそわぬ不見識な変化をしないのです。どんなに学習がやさしくなっても、目的が十分に果されないようなものを学習させるのは「教育」というものの名に反すると思います。それは「教育」を知らぬ者のすることです。教育とは、**自的**を果すためには、どんな**困難**でも克服するような力を養うことでしょう。ここでも、表音主義者は過誤を犯しています。

アランが「真に困難なのは、読み方を学ぶことだ」と言い、「精神が文字にひらめくまで、読み方を学習しなければならない」と言っていますが、このアランの言葉を聞き、フランス語の複雑な綴りを見る時、現在のフランスが、一年生から、毎日180分という驚くべきほどの国語学習をさせているのも、「なるほど」とうなずかれます。これほどにしてまで**古い綴りを守っている**のを、単なる「保守」という言葉でかたづけようとするのはあまりにも皮相的な見方といわなければなりません。アランが「綴りを変えることは、今までに得た文字の識別力を破壊すること」だと、指摘しているように、どこまでも**必要に基づいてのこと**であることを知らなければいけません。

第二は、「\$ £」のような記号や「A AA」のような略語が次第に多くなっている、という事実です。これらは、第一の「綴りの固定化」よりも一層徹底した「表意化」であって「\$・£」などは完全な表意文字だといって決してい過ぎではありません。略語でも、「a.m. (before noon) p.m. (afternoon)」などは、まさに表意文字というべきです。今、私の机上にある古い辞典(昭和14年版、大英和辞典、富山房)の巻末にある略語表を見ますと、約30語の略語が載っています。しかも、一字で、

数語から、多いのは十数語までを代表しているのがあります。例えば、最初に載っている「A」は、よく使われるものでも「答(Answer)」「面積の単位、アール(Are)」「エーカー(Acre)」「形容詞(Adjective)」「アルト」「アカデミー」「アメリカ」「四月」等があって、全部では二十数語を代表しています。この点については、わが国の音訓整理を企図し、これに賛成した人たちが、この「A」だけでも、二十数種類の意義を持つ事実をどのように批評するか聞きたいと思っています。

ともあれ、表音文字を使用している国の人々が、文字の表意化を願って、その作られる数が年々増加する一方にあることは事実です。朝日新聞の学芸欄で紹介された「絵画言語」(これは今世界中に広まりつつある)もその現われの一つです。このように世界における「表音文字の表意化」は現在では**明瞭な事実**なのです。日本だけが、「表意文字」のありがたさに慣れて、かえって、不自由な「表音化」にあこがれ、世界の大量に逆行を試みているのです。一体、「表音文字」とは「音」を表わすのを目的とした文字と考えるのが、くどいようですが、誤りなのです。誕生の最初から、目的はどこまでも「表意」にあったのです。ただ借り物の悲しさに、直接、表意ができないで、表音により**間接に表意**の目的を果したのです。このことを認めないかぎり、欧米諸国で、古い綴りを固守したり、略語や記号を使用する理由が理解できないだらうと思います。